

## 大学生のユニバーシティー・ブルー傾向測定尺度の作成 — スチューデント・アパシー傾向尺度との区別の視点から —

坂井 里奈 (Rina Sakai) 指導：青柳 肇

### 問題と目的

近年の大学生の無気力（スチューデント・アパシー）研究は、男子学生に後発し、学業に対する意欲低下による退却であり、場合によっては生活全般に無気力・無関心が及ぶとしている（Walters, 1961；笠原, 1981など）。

しかし、溝上（2002）は現代の大学生を説明する上で、「大学生という時期の捉え方」と「大学生活を充実させなければならぬと焦る大学生の現状」という概念が欠如しているとしている。

したがって、本研究では「ユニバーシティー・ブルー傾向測定尺度」を作成し、現代大学生の無気力の実態を調査、研究する。

### 研究1

#### 【目的】

大学生時代という時期の捉え方、学業に対する優先順位の低さといった「現代性」に着目し、ユニバーシティー・ブルー傾向尺度を作成する。

#### 【方法】

関東地方の大学生400名（男性226名、女性174名）を対象に、鉄島（1993）のアパシー傾向尺度31項目、下坂（2001）の無気力感尺度の19項目、ユニバーシティー・ブルーに関する文献などを参考にした78項目の全128項目からなる質問紙調査を実施した。

#### 【結果】

因子分析の結果、「展望の無さ」「学業軽視」「不安全感」「大学生活に対する焦り」の4因子が抽出された。（主因子法・プロマックス回転）

「展望の無さ」( $t(398)=2.70, p<.01$ )と「大学生活に対する焦り」( $t(398)=2.58, p<.01$ )については、男性より女性のほうが優位に高い得点を示した。「学業軽視」( $t(398)=1.88, p<.05$ )については女性より男性のほうが有意に高い傾向を示した。「不安全感」( $t(398)=1.12, n.s.$ )については、男女の得点差は有意ではなかった。また、下位尺度相関においては、相関のある下位尺度に男女で差がみられた。

### 研究2

#### 【目的】

インタビュー調査を行い、作成した尺度の妥当性の検討を行う。また、ユニバーシティー・ブルー傾向の高い者（以下、UB高群）とユニバーシティー・ブルー傾向の低い者（以下、UB低群）に分け、各群の違いを質的に比較・検討した。

#### 【方法】

関東地方の大学生20名（男性10名、女性10名）に「ユニバーシティー・ブルー傾向測定尺度」を用いた。その中で、UB高群5名、UB低群5名を抽出し、インタビュー調査を行った。

#### 【結果】

心理系大学教員と臨床心理系大学院生との討議の結果、内容的妥当性と因子的妥当性が保証された。インタビュー調査の結果「展望の無さ」については、目標の有無ではなく目標の無い自己に対しての認知が肯定的か否定的かが「展望の無さ」に影響していることが示された。

「学業軽視」については、UB低群において『これといった趣味がないから勉強している』などの消極的理由から学業に従事している学生がいることが明らかになった。

「不安全感」については、不適応的な現状や過去の失敗経験と自己の能力に対するの評価を混合してしまう「能力混合型」(UB高群)と、現在の怠惰などを限定的なものとして捉えて本来の学生自身の能力とは別だという「能力分離型」(UB低群)に分かれることが明らかにされた。

「大学生活に対する焦り」では、UB高群は大学生活で自己充実を図りたいという欲求と、大学生活に終わりが来ることに焦りを感じているということが明らかにされた。

#### 【総合考察】

「学業軽視」と「大学生活に対する焦り」という因子が抽出され、大学生の無気力において新たな概念が明らかとなった。また、従来のアパシー研究とは異なり、女性対象とし大学生の無気力を研究する必要があると改めて示唆された。